

徳久報

No.0024

発行
令和元年10月

発行元 徳泉寺

仙台市宮城野区
榴岡 3-10-3

(022) 297-4248

二〇一九年度 報恩講

勤修

二〇一九年一〇月二四日(木) 徳泉寺報恩講が勤修されました。報恩講とは宗祖親鸞聖人の御命日を縁として、私たちのもとに届いた仏の教えを改めて聞き、いのちについて見つめ直す法要として真宗の各寺院で年に一度行われています。

今年も一週間前から本堂のお荘厳を磨く「お磨き」に始まり、前日の清掃や料理のごしらえ、会場のセッティングなど同朋会の会員が中心となり万全の準備を整えて当日を迎えることができました。

当日は一一時半より、心を込めて手作りされたお齋をいただき、本堂でこの日にしか掲げられない親鸞聖人の御一生が描かれた掛け軸の絵解きを行いました。一三時から五十名ほどの参詣者と十名の僧侶による「正信偈」の勤行。続いて藤内和光氏による法話を頂戴して、厳粛なうちに今年の報恩講を終えることができました。不安定な天候が続くなかでしたが、みなさまの支えをいただいでこうして無事に勤修することができました。ありがとうございました。



法話の様子



ご本尊のお荘厳

講師法話より (一部抜粋)

私たちは自我をわたくしだと思っています。

しかしその実、自我とは妄想に過ぎません。私が私だと思っているものは非常にあいまいで実体としてあるわけではないのです。考えてみてください。私が私だと思っているこの体、眉毛一本、髪の毛一本でさえ自分で作ったものではありません。すべてブレゼントされ贈られたものなのです。その身体で以て私たちは自分を一番可愛い者として利己的で自分本位に生きています。ですが、それもまた私という命が生まれた瞬間からずっと言えば地球に生命として誕生した三十八億年、口に物を入れることを何よりも大切にしてきた命そのものの持つ業(ごう)カルマなのです。しかし私たちの自我の奥底にある本当の我はどこまでも身勝手なものなのでしょうか。沖繩の方言に「ちむぐりさ(肝苦りさ)」という言葉があります。相手の辛さや苦しみに自分の肝が痛くなる、という意味の言葉です。この言葉は本当の私の中心にある我を意識させてくれます。私たちは本当は心の奥底では、あらゆる人々とともに生き生きとなまの私を生ききりたい、生まれて良かったと言えるものになりたいと願っています。自我でいっぱい身勝手な私から、私の中にある本当の我に気づかせ、変え成すこの働きを、阿弥陀の本願力といえます。

煩惱に悩まされる私はなくなるわけではありません。しかし本当の私の願いに気づいたなら、(あ、私はまた妄念の私を生きているな)とそこを離れることができるようになります。このように私が妄念の私にとらわれることなく、本当の私を生きられるようにと願ってください。いるのが阿弥陀如来なのです。

講師 藤内和光氏
いわき市明賢寺 住職

